



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

―第二二八号―

芒種 ぼうしゅ

六月五日

神島の銅鏡

伊勢志摩には想像以上に宝物がある。鳥羽市の離島、神島で古代の銅鏡を見たときの驚きは今も忘れることはできません。この鏡は、島の八代神社に奉納されたもので、古墳時代（三世紀後半～七世紀頃）、奈良時代、平安時代以降とそれぞれの時代にわたっています。その数は六十四面にのびります。

私が八代神社の収蔵庫で拝見したのは数枚でしたが、三重県総合博物館では、重要文化財指定の六十四面すべてを一堂に展示しています。手の込んだ装飾が施された画文帯神獸鏡、花びらの形をした優美な花卉双蝶八花鏡のほか、藤の花や松、鳥、秋草など季節の風物を文様にしたものが多く見られます。こうした銅鏡は、潮流の速い伊勢湾口を航行する船の安全を祈願して、伊勢湾口に浮かぶ神島の神社に奉納したと考えられています。大和朝廷が全国を統一していく時代から、この伊勢湾口は重要な航路であったことがよくわかります。ずらりと並ぶ銅鏡には、古い昔の切なる祈りが込められているのです。

そして、目を引いたのが、金銅製のミニチュア紡織具でした。古代の機械の道具です。先端が二つに分かれた「たたり」は糸かけ道具、I字型をした枠は糸を巻き取り輪状の束の形にする道具です。伊勢神宮の神宝にもあり、遠く九州の沖ノ島で発見されたものとよく似ています。玄界灘に浮かぶ沖ノ島は島全体が御神体とされ、入島が厳しく制限されてきました。日本と朝鮮半島を結ぶ航路の途中にあり、祭祀遺跡調査では四～九世紀の神宝が約八万点出土しました。そのため、「海の正倉院」といわれていますが、神島はさしずめ「東の沖ノ島」だと思いました。この展示会は、六月十九日まで。神島の宝をぜひ見てほしいものです。

文 千種清美

